

平成23年度
入学試験問題

国 語

特待生
前期

受験番号	氏 名

中村中学校

□ 一 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 決定にイゾンはありません。
- (2) 山のチュウフクまで車で行く。
- (3) ピカソの絵はドクソウ的である。
- (4) 左右のヒリツを考えて線をひく。
- (5) 飛行機のソウジュウ士を目指している。
- (6) 屋上での遊びはゲンキンされている。
- (7) 宇宙はサイゲンなく続いている。
- (8) 試合で勝利をオサめることができた。
- (9) 犬がしっぽをマいてにげる。
- (10) 青い顔が赤みをオびる。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

関東北部のある村で毎年行なわれる「花まつり」の映像を、テレビで観た。ツツジが名産の村だそう。ツツジの開花が盛りを迎えた頃、子どもたちは村じゅうのツツジの花をちぎり、籠にどっさり集めて、それを弄ぶ、空にぶちまける、道に棄てる……。せつかく村人たちが大事に育てた花をひきちぎって、あたりにぶちまけるとは何ごとかと、眼を疑った。植物にくわしい人にきくと、翌年の収穫のためにはある程度の「間引き」が必要なのだという。なるほどと思いつつも、それを子どもに無礼講のような祭りとして行なわせるには何かそれ以上の意味があるように思えてならなかったのだが、そのときはその意味がまだよくつかめなかった。

たまたまそのすぐあとに、ある高名な華道家が花を生ける場に居合わせる機会を得た。それまで生け花を間近に見たことがなかったわたしは、ここでも眼を疑うような情景に出会うことになった。伊豆の山中から採ってきた古木の孔に、椿の枝から花と葉をむしりとつ

て花一輪だけ残したものを生ける作品だった。木を折る、割る、切る、枝をさく、曲げる、ためる、葉をむしる、花をちぎる、そして

※ 最後は剣山にさす……。これでは「生け花」どころか「いじめ花」「殺し花」ではないかと、心おだやかならず思った。

I 大切に育てたそのいのちを奪う。壊し、棄てる。せつかく大事に育てたものをなぜ? この問いがずっと胸につかえていたのだが、あるときふと思った。わたしたちが日々していることを、これはただ映しているだけなのではないか、と。

わたしたちは、何かを食べないと生きてゆけない。そのために、家畜として獣を育て、そして殺す。漁をし、持ち帰った魚をさばく。野菜として育て、そして葉っぱをむしる。そしてそれらのいのちをおいしく(食べる)。この、人間の生活のいちばん根幹にある営み、その「実相」から眼をそらして、それらを食べ残したり棄てたりすることがないようにとの戒めとして、この祭り、この芸道はあったのではないか。

そんな思いをぶつけるというつもりではなかったが、そのあとしばらくして、こんどは中川幸夫さんという、八十歳もとうに過ぎた「前衛」の華道家を(訪ねる)ことになった。華道の意味がどこにあるのか、それをどうしても知りたくて、である。

〈中略〉

「花って、蕾つぼみから開いたり、くずれていたりして、いろいろ自分の付き合い方があります。生きものとして、花と人間は同じ」と、その日、中川さんはわたしに（言った）。そして、室町時代の「たばな」のお手本の束を見せてくださった。節分の頃、葉が乱れ、

A きたときのその水仙すいせんを生けるお手本だ。水仙の生げどきはふつう、日本刀の刃はのようにきりつと葉がのびてるときだといわれる。ところが、室町時代の花人は、水仙の **B** 姿をも、まぎれもない水仙の一つのいのちとして生けた。水仙のいのちを最初から最期まで見とどけようとしていた。

ひるがえってわたしたちは、自分たちのいのちの「真相」^④をきくと見とどけてきただろうか。

⑤ いのちには、誕生から成長、成熟、そして病いと老いと死という、のっぴきならない過程がある。これはあまりにも峻厳しゅんげんな事実である。けれども、これらの峻厳な一連の出来事を、わたしたちは、自分たちの日々の暮らしからいわばシステマティックに見えなくしてきたのではないだろうか。わたしたちの社会は、そのつどいのちのまぎれもない過程であるはずの生老病死を、一貫いつかんして遠ざけてきはしなかっただろうか。いのちのその世話を自分たちではじかにせず、外部のサーヴィス機関に任せっきりにしてきはしなかったら

うか。そしてそのことで、他のいのちとのじかの接触せつしよくをさせてきたのではあるまいか。

社会が近代化してゆく過程で、わたしたちは、調理に限らず、生きるということの基礎きそとなるいくつかの営みを一つひとつ順に、「家事」の場である家族という場所の外へと放出してきた。つまり、外部のサーヴィス業者に委託いたたくしていった。炊事すいじ、洗濯せんたく、被服ひふく、掃除そうじ、育児、老人の介護かいご、教育、家族の看護、出産、葬送そうそう、そして地域の相互扶助活動さうごふじよなど、それまでは市場経済の外にあった「家事」という名の労働が、サーヴィス業として外部化され、企業化きぎやうかされていった。レストランや外食産業、クリーニング業、[※]アパレル産業、清掃業、保育所、養護老人施設、学習塾じゅくや予備校、病院や看護師派遣業やシルバー産業、ブライダル産業、葬儀会社、マンション管理会社などがそうであり、さらにコンビニエンス・ストアがそうである。が、これを言いかえると、助け合って生きるということのもっとも基本的な営みが、日常生活の身近な場面でじかに目撃もくげきされなくなっただということでもある。

〈中略〉

それどころではない。わたしたちはもう他のいのちにじかにふれ

ることすらさけるようになっていく。スーパーマーケットではあらゆる食料品が、肉も魚も野菜も果物も天麩羅も蒲鉾も、みな表面が⑦様に透明ラップでおおわれ、同一の肌理（表面の感触）をなしているのは、考えてみればこわい事実である。テレビがあらゆる物質を一樣な映像に還元するように、透明ラップはあらゆる物質を同じ表面の感触に変えてしまう。そして透明の薄膜で物との接触を禁じてしまう。他のいのちの感触から、わたしたちはほとんど遠ざかってゆくのである。

人間が食べるもの、それは塩や水を除いては、みないのちのあるものだ。肉、魚、虫、穀物、野菜、果物。どれもこれも生きものだ。食べるためには、ときにそれらをしとめ、焼いたり煮たりしなければならぬし、ときにそれらを引きぬいたり引きちぎったりしなければならぬ。そして口に入れ、かみ砕いて、飲み込む。人はそのように、他の生きものを殺すことでしか生きつづけられない。それも一日に何度も。

人は自分が生きるために他の生命をくりかえし破壊しているという。そのとき、他の生命は渾身の力をふりしぼって抗うという。人はその生存のために一つの作業を分かちあい、支えあうものである。自分という存在がまぎれもない物そのものであり、生まれもすれば壊れもする、消滅もするということ……。そうい

うことからのだごとの体験がことごとく削除されている。

このようにわたしたちの社会は、他のいのちを奪うことでみずからいのちをつなぐという、この生の残酷な事実を隠してきた。

（鷺田清一「へいのち」への問い『いのちってなんだろう』所収）

- ※ 無礼講……かたくるしい礼儀にこだわらない会合。
- ※ ためる……曲がっているものをまっすぐに直す。
- ※ 剣山……花をさして安定させるための華道用具。
- ※ 峻厳……きわめてきびしいこと。
- ※ システマティック……組織的。
- ※ 市場経済……金銭のやりとりで成り立つ世界。
- ※ アパレル産業……衣料品産業。

問一 —— 線①について、筆者はなぜ「眼を疑」ったのですか。

次から最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア、有名な華道家が実際に花を生ける場を初めて見て、その大

胆たな手法におどろいたから。

イ、大切に育てたいのちを奪い、殺すことが「生け花」なのだ
と思知らされたから。

ウ、「生け花」とは花を生かすものだと思っていたのに、華道
家が植物を傷つけ、命を奪っていたから。

エ、華道家が、「花まつり」の映像で見た子どもたちよりも、
残酷なことをしていたから。

問二 I に入る適当な慣用句を次から一つ選び、記号で答え

なさい。

ア、頭を痛めて

イ、目くじらを立てて

ウ、足を棒にして

エ、手塩にかけて

問三 ～～～線 a ～ c の語について、この場にふさわしい敬語表現

に直したものととして適当なものをそれぞれ選び、記号で答え
なさい。

a 「食べる」

ア、くださる

イ、いただく

ウ、お食べになる

エ、めし上がる

b 「訪ねる」

ア、お訪ねされる

イ、お訪ねになる

ウ、お訪ねなさる

エ、お訪ねする

c 「言った」

ア、おっしゃった

イ、おっしゃられた

ウ、申された

エ、申し上げた

問四 —— 線②「この、人間の生活のいちばん根幹にある営み」

とありますが、ここではどのようなことを指しますか。本文

中の語句を用いて四十字以内で説明しなさい。

問五 —— 線③について、筆者が「中川さん」から教わった「華

道の意味」とはどのようなことですか。本文中の語句を用いて二十五字以内で答えなさい。

問九 —— 線⑥について、具体的な「家事」を一つ取り上げ、こ

の内容をわかりやすく説明しなさい。なお、具体例は本文中に取り上げられているものを用いて構いません。

問六

A

、

B

に入る言葉の組み合わせとして適当な

ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、A のびて B のびた

イ、A ひらいて B ひらいた

ウ、A なえて B なえた

エ、A やつれて B やつれた

問十 —— 線⑦について、筆者が「こわい」というのはなぜです

か。それを説明した次の文章の空らんには、本文中の語句を用いてそれぞれ二十五字以内で適当な言葉を補いなさい。

人間はそもそも (1) のに、そのことを忘れて、あら

ゆる食料品を一樣に透明ラップでおおい、表面を同じ感触にし

てしまうことは (2) ことになるから。

問七 —— 線④「いのちの『実相』」とは、ここではどのような

ものを表していますか。本文中から一語でぬき出して答えな

さい。

問八 —— 線⑤「のっぴきならない」の意味として最も適当なも

のを選び、記号で答えなさい。

ア、さげられない イ、はてしない

ウ、とるにたらない エ、他人事ではない

問十一 本文の内容に合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、花まつりでは、子どもたちが葉をむしったり花をちぎったりしている姿が見られるが、これは、植物そのものやそれを大切に育てた人を侮辱する行為である。

イ、社会が近代化していく中で、人間は、助け合って生きていくという一番大切なことを忘れ、自分自身にも他の存在にも鈍感になってしまっている。

ウ、今の社会では、家族のあり方が不安定になっており、日常生活を陰で支える外部のサーヴィス機関が今後もさらに発展していくことが望まれる。

エ、人間は、他の生物のいのちを踏みにじってぜいたくに暮らす高慢な存在であり、支え合う社会を作るためにも、その生き方を見直すべきときが来ている。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

一九六三年、東京の小学校に通っていた新一は、父の破産によりひとり九州の炭坑町に預けられることになる。父がむかえに来る日まで、父の兵隊時代の友人である野上源一郎とその家族がめんどうを見てくれることになったのだが、初めて会った時から乱暴な言葉で自分に接し、すぐどなったり頭をこづいたりする源一郎を新一は好きになれそうもないと感じていた。源一郎と共に彼の家に行くと、そこには源一郎の妻である優しいおばさんと、源一郎の父であるお爺ちゃん、それから犬のシバがいた。源一郎の子供たちには、これから会うことになる。

玄関戸の開く音がした。僕は息をこらし、慌てて畳の上に散らばった衣類をバッグにしまった。ふいにシバが狂ったように喜びはじめる。玄関のほうを食い入るように見つめながら、ちぎれんばかりに尻尾を振る。おばさんでも帰ってきたのかと思い、玄関を見ようとする。ただいまと言う声が出て、坊主頭の少年が部屋に駆けあがってきた。

僕は息を呑んだ。まわりの空気が変わった。一気に部屋のなかに緊張感がみなぎる。少年は僕を見るなり仁王立ちになると、拳を固めて睨みつけてきた。顎を意識的にぐいと引き、眼差しに力をこ

めて見据えてくる。僕と同一年ぐらいだろうが、顔は大人のように
ふてぶてしく、利かん気と喧嘩の多さを物語るように、頬のあたり
に凄みのある生傷が数本走っている。

「おまえが新一か」

僕は思わず吹き出した。

「笑うな。おまえが立花新一か」

僕は **1** 確信した。まったく言うことがあの二人と同じな
のだ。少年は間違いなく、野上源一郎の子どもであり、お爺ちゃん
の孫であることは疑いようがない。自分でも不思議なくらい、恐
怖心とぎこちなさがすうっと消えていった。少年も野上家の男の一
員であるならば、前の二人と同じ反応をすればいいのだ。

僕は大きく頷いて答えた。

「うん、そうだよ」

「いつ着いたとか」

「昼ごろ着いたんだ。もう学校にも行ってきたよ、君のお父さんと」

「お父さんなんち洒落たもんはうちにはおらん。酒飲みの父ちゃん
ならおるけんど」

また吹き出しそうになった。ひねくれた言い草まで、野上源一郎
にそっくりだ。だが、少年には **2** 憎めないところがある。

シバが濡縁に前足をかけて、甘えるようにくんくんと鳴きながら、

盛んに尻尾を振っている。それを少年は横目で見ながら、なおも僕
を警戒しつつ、ランドセルを畳に置くと、なかから西洋紙の包みを
取り出し、シバのほうへ近づいていく。

包みのなかには、給食の残りものらしいコッペパンが入ってい
て、少年は小さくちぎってはシバにやる。そのあいだも、決して僕
から目を離そうとはしない。敵意のこもった眼差しでじっと睨み続
ける。 **3** 僕も見返す。心のなかで、これも二、三日の辛抱
だと自分に言い聞かせながら。

コッペパンをやり終えると、少年はランドセルを持ちあげて言った。

「となりに行ったか」

「えっ、なに……」

「きさんは日本語も分からんとか」

そっくりと言うより、少年は小さな野上源一郎だ。

「日本語は分かるけど、君の言ってることが分からないんだ」

「分からんなら、ついちこい」

少年は濡縁に駆け出た。僕は覚悟を決めた。

I

なにが気に障ったのか分からないけれど、少年の物言いには、
腕力で決着をつけようという強い響きがこめられていた。僕はバッ
グを持って立ちあがると、しぶしぶ少年のあとを追った。

濡縁に出てみたが、少年の姿がない。裏庭にもいないようだし、

忽然と消えてしまったようだ。シバが隣の家との境の板塀に鼻先をつけて、くんくんと鳴いているほかは、変わったところはひとつもない。少年はどこに行ってしまったのだろうか。

「開けて入ってこい。その戸を開けるんたい」

よく見ると、濡縁の端っこの、隣の家との境の板塀の端に、蝶番がついていた。

「これ。このドアを開けるの」

「ドアなんち洒落たもんはうちにはない。その戸を開けるんたい」

言われるまま、板塀の戸をおそろおそろ開けた僕の目に、最初に飛びこんできたのは、奇怪な形をしたおんぼろの掘立小屋だった。

隣の家の庭を半分ほど領する格好で、今にも倒れそうな姿で建っていた。錆だらけのトタン屋根の上には、風で飛ばされないように石が載せてある。壁板の色も形もまちまちで、あっちこっち好きなように曲がったり、ねじれたりしている。

一応、二階建てのようだ。一階は鶏小屋になっていて、上は天井の低い、物置然とした造りになっている。その物置へ出入りするには、濡縁から渡された竹の梯子を使うらしい。

シバが戸の隙間から駆けこんでくる。掘立小屋の二階に向かって吠えはじめると、少年が梯子を伝って降りてきた。少年は身軽に僕の横に飛び降りると、シバを優しく撫ぜながら、さも自慢そうに胸

を張って、目の前の掘立小屋を指さした。

③「どう思う。きさんは、これどう思う」

少年の瞳が、異様にきらきらと輝いている。その様子から見ると、どうも掘立小屋は少年がこしらえたものらしい。ならば、下手なことは言えない。返事次第では本当に痛い目にあいかねない。少年は僕よりも小柄だが、見るからに腕っ節が強そうだ。

④ どう見てもこの掘立小屋が素晴らしいとは言えない。バラックといってもおかしくない外観だ。どだいこんなものに対して、感想を聞くこと自体どうかしている。だが、どことなく船に似ていなくもない。一階の鶏小屋は普通の長方形だが、二階の物置は壁板が少しずつたわみながら、奥へ行くほど船の舳先のように細くなっている。ちょうど出来そこないの屋形船のようだ。

⑤ ぴんとくるものがあって、僕は勢いこんで言った。

④ 「これ、君が造ったの。まるで船みたいだね」
少年の態度が変わった。まさしく一変した。敵意に満ちた眼差しがふいに和らぎ、親しみのこもった笑みが満面に広がった。ひどく照れ臭そうに頭をかきながら、しつこいほどに、船に見えるか、本当に船に見えるかと幾度も尋ねてくる。⑤ そのたびに僕はおおげさに頷いて、心からの賛意を表わした。

少年がにこにこして言う。

「俺、竹雄。みんなから、竹ちゃんち呼ばれよる。だけん、おまえも呼んでいいぞ。俺はおまえんこと、新ちゃんち呼ぶきの。いいな、そうしような」

謎が解けた。この少年が、お爺ちゃんの言ったタケだったのだ。

「学校に行ったち言うたけど、新ちゃんは何組に入るとな」

「校長先生は、六年二組と言ったけど」

「ああ、黒田の学級やな。黒田のあだ名は、マメグロち言うんばい」

「なんで」

「体がちいそうて、名前んとおり顔が石炭みたいに真黒い」

僕は尋ねた。

「君は何組なの」

少年が顔をしかめた。

「君なんち他人行儀なこと言うな。竹ちゃんち呼ばいいとたい」

僕は慌てて言い直した。

「竹ちゃんは何組なの」

「だいたいよかばってん、最後の、のが気に入らん。そげな言い方

しよったら、みんなから笑われるばい。男らしゅうさっぱりと、何

組か、ち聞きやいとたい」

「竹ちゃんは何組か」

「もういっぺん言うてみ」

「竹ちゃんは何組か」

「腹に力入れてかましてみ」

「竹ちゃんは何組か」

「それでよか。新ちゃんは物覚えがよかなあ。俺は、六年六組。新ちゃんのすぐ上の組におる」

少年は、いや竹ちゃんは、僕の肩をさも兄貴ぶった素振りて叩いた。

「俺がおるき心配なかぞ。なんかあったら俺が新ちゃん助けてやるき、心配なかぞ。いいな、なんも心配せんでよかけんな」

竹ちゃんは噛んで含めるように言うて、また僕の肩を

II

仕草で、まかせておけと言わんばかりに叩いた。同級生に二度にもわたって、そんな態度を取られるのは、かなり歯がゆい思いがしたが、竹ちゃんの言葉は頼もしく心に響いた。不安だらけの僕にとって、この一方的な友の出現は、正直ありがたかった。

(上野哲也『ニライカナイの空で』)

※濡縁……和風建築で、雨戸の外側につけた縁側。

※蝶番……開き戸や開き窓などが開閉できるようにとりつける金具。

※トタン……亜鉛でめっきしたうすい鉄板。

※バラック……一時的に建てた、粗末な家屋。

※舳先……船首。

問一 ―― 線①とありますが、少年がこのようにすごんだ様子で

新一をにらんできたのはなぜだと考えられますか。その理由を三十字以内で説明しなさい。

問二 1 3 に入る言葉をそれぞれ次から選び、記号で

答えなさい。

ア、仕方なく

イ、快く

ウ、どこことなく

エ、強く

問三 ―― 線②とありますが、「僕」(新一)がこのような心持ち

になったのはどうしてですか。次の中から最も適当なものを
選び、記号で答えなさい。

ア、自分をにらみつける少年に最初は恐怖心を感じていたが、

少年が野上源一郎の子供で、お爺ちゃんの孫だと思えばその
ふてぶてしい態度にも納得なっとくができ、対処の仕方も難しく
ないと思ったから。

イ、自分をにらみつける少年に、初めは取りつく島がないよう
に感じて、ただただ恐ろしいばかりだったが、少年が顔に
似合わず意外にひょうきんな一面も持ち合わせていること
がわかったから。

ウ、少年の父親と思われる野上源一郎のいばった様子から想像
すると、少年が自分に対していばった態度を取るのも、父
親と同様の小心さのあらわれであり、全くこわがるにはお
よばないとわかったから。

エ、決して好きにはなれないものの、野上源一郎もお爺ちゃん
も根は温かな人物であり、ふてぶてしい態度を取るこの少
年も時間がたてば自分を受け入れ、温かく接してくれるよ
うになると確信したから。

問四 I に入る一文を次から選び、記号で答えなさい。

- ア、この家から脱出する決心が固まった。
- イ、東京に帰らされるのだと悲しかった。
- ウ、いよいよ殴られるんだと思った。
- エ、こうなったら決闘だと意気こんだ。

問五 —— 線③とありますが、この時の少年の気持ちとして最も

- 適当なものはどれですか。次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア、新一が掘立小屋の様子に感心しないならば、腕力で殴り倒してやろうと待ちかまえるような気持ち。
- イ、都会育ちのひ弱な新一には作れそうもない小屋を見せて彼を圧倒し、早く自分の手下にしたいという気持ち。
- ウ、優しそうな新一なら自分の趣味にすぐ共感してくれそうなので、早く友だちになりたくてうずうずしている気持ち。
- エ、新一が自分の作った小屋の様子に感心し、その工夫にまで気が付いてくれたらと心の奥底で期待する気持ち。

問六 —— 線④とありますが、少年の変化の様子として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の作った小屋に賛意を表してくれた新一に、ようやく打ち解ける気持ちになっている。
- イ、船をかたどって作った小屋を、初めて見た新一にそれと認めてもらえ、とても喜んでいいる。
- ウ、自分の作った小屋を船みたいだとほめられたが全く信じられず、新一の真意を確かめている。
- エ、自分の作った小屋を船みたいだと新一にほめられ、ひどくはにかんでいる。

問七 —— 線⑤とありますが、この時の「僕」の気持ちを六十字

以内で説明しなさい。

問八 —— 線A・Bはそれぞれどのような様子を表す言葉ですか。

最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア、上品さ イ、ていねいさ ウ、男らしさ
- エ、女らしさ オ、おもしろさ カ、よそよそしさ
- キ、不真面目さ ク、おくゆかしさ

問九 Ⅱ に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア、大人ぶった

イ、冗談じょうだんめかした

ウ、照れくさそうな

エ、しなをつくった

問十 「竹ちゃん」(竹雄)はどのような人物として描えがかれています

か。三十字以内で書きなさい。